

令和5年度第2回宮城県試験研究機関評価委員会
林業関係試験研究機関評価部会議事録

日 時：令和5年11月30日（木）
午前10時～午前12時
場 所：宮城県林業技術総合センター研修棟

1 委員出席者

所 属・役 職	委員名	摘 要
国立大学法人東北大学大学院農学研究科 教授	陶山 佳久	部会長
尚綱学院大学 環境構想学科 准教授	鳥羽 妙	副部会長
設計事務所「ひと・環境設計」 代表	星 ひとみ	
宮城県森林組合連合会 代表理事会長	大内 伸之	
株式会社山大 開発生産部 アドバイザー	相澤 秀郎	

2 宮城県林業技術総合センター関係出席者

所長 青木寿、副参事兼総括次長 佐々木啓樹、
企画管理部長 千葉利幸、試験研究部長 玉田克志、
普及・研修部長 鈴木篤、担当研究員ほか

3 議題及び議事録

(1) 開会（佐々木総括次長）

- ・資料の確認・日程の説明を行った。
- ・情報公開条例に則して、公開となっている旨を報告した。
- ・委員5名の出席を確認した。

(2) 所長あいさつ（青木所長）

それでは今年度第2回目となります。宮城県試験研究評価委員会林業関係試験研究機関評価部の開会にあたりまして、一言あいさつ申し上げます。

本日、陶山部会長をはじめ委員の皆様には年末の何かと御多忙のところ、また、雪の中ご出席を賜り、誠にありがとうございます。令和5年度も残り4ヶ月となり、所管の研究課題も徐々に成果がまとまってきたり、また次年度の課題につきましても円滑に検討が進められていると思っております。委員の方々には日頃から試験研究の評価や林業行政、本センターの運営について格別のご理解とご指導ご助言を賜っておりますことに改めて感謝申し上げます。

さて、ウクライナやハマスなど国際情勢が一段と不安定化し、不確実性が高まっている状況ですが、林業分野においては、県内に留まらず他県も含めた業界関係者の協力の輪が広まっており、各種調査等におけるAIの活用や、ICT技術の活用による木材流通改革など、新しい分野の技術導入も着実に歩みを進めており、より実装、実現に現実味が出てきたところです。さらに、当センターの新たな柱として、機能に加えた林業人材の確保・育成においても、昨年5月に「みやぎ森林・林業未来創造カレッジ」が本格的に開講して以来、準備した各種研修について、会員企業の協力ご支援のもと、順調にそれぞれの

講座を展開しているところであり、引き続き林業の重要産業であるスマート化や広葉樹材の利用促進、育林作業のビジネス化などの解決に向けて重点的に取り組んでいく考えです。当センターでは、林業の成長産業化というビジョンに掲げる目標達成に向けて行政の下支えとなる試験研究や種苗生産活動を普及指導部門や企業との連携による研究、成果の実装などに取り組んでいきますので、各位の皆様には今後ともご助言とご指導をよろしくお願い致します。

本日は令和6年度の新規課題のうち重点的研究課題1課題に関する事前評価を議題に掲げております。また報告事項としまして、今回盛り沢山になりますが、今年度第1回の部会でご審議いただきました事後評価に対する対応報告、本日の議題以外の新規課題の内部評価結果、令和6年度試験研究（案）などを説明させていただきます。各委員の方々からいただきました貴重なご意見やご助言につきまして、内部で十分検討しながら真摯に対応を考え、試験研究課題の熟度の向上や当センターの運営改善につなげていきたいと考えておりますので、どうか忌憚のないご意見ご指摘を賜りますようお願い申し上げます。本日はよろしくお願い致します。

部会長あいさつ（陶山部会長）

開会に当たりまして一言挨拶させていただきます。

先日、台湾の方に調査に行きまして、そのときのことを話したいと思います。もともとの目的は、本年度になってから日本の針葉樹の履歴を全部調べ直そうというプロジェクトを始めていて、その一環として、台湾の針葉樹を調べに行きました。具体的にはヒノキの変種に当たるタイワンヒノキとサワラの近縁樹に当たるタイワンベニヒノキっていうのがあり、それらのサンプリングに行ってきたんですけども、ご存じのとおり、台湾は日本が統治している時代に盛んに伐採して、木材生産をしてきたところですけども、その切り残りと言いますか、今もまだ残っています。僕が見た中で最大のものは樹齢が2700年と推定されていて、直径が6.7mもあるものすごく大きなものがありました。「神木」って神様の木と書いてすごく大事にされていて、切り残りではあるんですけども、まだそこに残っていて、非常に感動しました。実際のところ日本にそんな大きなヒノキはないので、神社仏閣とか明治神宮の鳥居とかもそうでしたと思うんですけども、大きな木が必要なときに台湾から切ってきてということは言われているようなんです。今は台湾は大きな伐採は基本的にはしないということになっているので、もうそういった木は切られることはないんですけど、とにかくその大きな日本でも見ないようなヒノキの大木が、普通に縄文杉のような大木が残っている状態は非常に感動しました。それが一つ目なんですけども、まあ、結構奥の方まで行くんですけども、場所によっては観光地化されているところがあって、驚いたのは、ものすごくたくさんシニアを中心とした方々が森を観るといって、散策をしているとか、自然に親しむことをしに来ているということでした。おそらく特に行楽シーズンでもないし、休日でもないし、ゴールデンウィークのような、ものすごくたくさんの方が散策に来ていて、その姿を見た時に、ああ、これもなかなかいいなというふうに思いました。なんていうか、自然に親しむ。現地の大学の先生にも聞いたんですけども、そういう趣向が非常に強いというふうに言っ

ていました。ちゃんと調べたわけではないので事実かどうかはわからないんですけども、僕の見限り本当に非常に多くの方が楽しそうに自然の中に親しんでいるという姿を見て、ああ、これもいいなと思いました。やはり宮城県の将来を考えたときに、このセンターは林業、林産物、森林に関わるセンターですので、そういった環境を残す将来像というのは、僕が台湾で見たような多くの方が自然に親しむような環境を残すというか、整備するというか、用意するとか、そういうのも一つの将来性としてあるんだなということを改めて思いました。先ほど言った大木が残っている、そういう林業としての資源だけじゃなくて、観光資源としての樹木森林っていうのもやはりものすごく重要なんだなということを改めて思ったので、多面的な機能と言いますか、観光も含めた、森林の多面的な機能というのは本当に有効に生かしてくってというのがやはり重要だなってことを改めて思いました。なので、この宮城県としてせっかく恵まれた資源があるところですので、そういった見られる将来像、未来像に向けて、このセンターが果たす役割もあるんじゃないかなというふうに思いました。今日の審議事項はきのこですけれども、これも別の意味で県民の豊かな生活に寄与しうる内容だと思います。そういった視点からも非常に重要な研究課題だと思っています。また今日も忌憚のない意見を言わせていただきますので、よろしくお願いします。

(3) 令和5年度第1回評価部会における評価結果への対応について
青木所長が資料1に基づき概要を説明した。

(4) 業務評価方法の説明について
千葉企画管理部長が、資料2に基づき概要を説明した。

(5) 議事

1) 審議事項

- ① 新規研究課題（重点的課題）の事前評価について
課題名：ハタケシメジ新品種の栽培技術の確立
目黒研究員が資料3-1及び資料3-2により説明した。
質疑・意見については次のとおりである。

陶山部会長

毎回同じようなことを言っているので繰り返しになりますが、非常に推進すべき研究だと思っています。いろいろ考えられているなど、よくわかりました。このハタケシメジの研究は、伝統的にこのセンターでずっと行われていることなので、推進すべき研究の一つだと思います。これがなぜいいかと思っている理由はいくつかあって、その成果はもちろん、生産者の利益につながるということと、県産の品種ということで、県の独自性、固有性というか、県の特徴が出ることになるので、そういう意味でも県の魅力につながる、そういうものの一つだと思います。たとえ生産量が少ないとしても、こういうものがいくつあるということは、県としての魅力につながることなので、非常に重要だと思いますし、それがひいては県民の利益、県民が県のもので美味しいものを食べられるという利益につなが

って、そういったことが非常にいいことにつながっているので全体として推進すべき研究だと思っています。その上でなんですけれども、やっぱり具体的な目標を挙げた方がいいかなというふうに、これに限らずいつも思っています。というのは目標というよりも大きな大目標みたいなものを挙げた方がいいかもしれないという気がしていて、よくバックキャストというんですが、将来像を作って、それに向けて必要なことをやっていくというやり方なんです。例えばこの場合は、一体どれぐらいの生産量を目指すのかということを検討して、それを一つ挙げて、そのために必要な生産率や、そのために必要なマニュアルとか、そういうふうに落としていくと、多分、実現する可能性は高くなります。最初のグラフでのきのこの生産量、結構多いんですが、多分、ハタケシメジって、ものすごく少ないと思って、それを一体どれぐらいに持っていくのか、いつぐらいにどれぐらいにもっていくか。そうすると、例えばこの栽培方法じゃこれだけ普及・生産できるようにならないと、とか、これだけの生産者がいないとこれだけの生産量を上げられないということになってくると、どういう生産方法を考えたらいいかというふうにバックキャストしてくるので、そのためにはどうしたらいいかって考えることができます。もしかしたらこれは担当者じゃなくて上の方が考えるかもしれないですけども、その大目標みたいなものを挙げた方がいいかなと思いました。それはやっぱり例えば性能維持につながって、一体この性能維持を何年間やるのか、20年なのか、10年とか30年なのかということ具体的に考えると、そのために必要な維持管理技術ということになって、目標がはっきりして、20年も経つと、その次の開発をいつ頃始めなきゃいけないっていう流れになってくるので、そういう長い目、大きい目での大きな目標を最初に決めてバックキャストして考えていくと、よりいい研究になるかなと思いました。研究自体粛々と進めていく内容が多いですし、確実に進んでいくと思うので、あまり心配はしていないんですが、そういうふうなバックキャストして、もっと効率的になれると、社会実装に確実につながる成果がある研究になると思いました。最後にもう一つ。言われていたので大丈夫だと思うんですけども、結構技術開発の中で論文とか研究発表できるというような、きちっとした技術開発ができる可能性もあるので、それは確実に発表していただきたいと思います。それプラス、きちっとした形で表せないようなノウハウを玉田さんがたくさん持っていらっしゃると思うんですけども、独自のノウハウレベルの技術として作り出されるようなものがたくさんあるような気がしたので、もちろん発表できるような、きちっとした形にするのはいいと思うんですけども、それはそれでものすごくコストが掛かったりすることもあるので、ノウハウと二つ切り分けて、発表できるものはきちっと確立して科学的にはつき

りしたものを持ってくるっていうのと、ノウハウレベルのものも見落とさずにきっちりやっていただくといいかなと思いました。玉田さんから繋がっていくと思うんですが、その後も継承されていかないと意味がないので、ノウハウレベルのものであってもきちんと継承することをしていただければいいかなと思いました。大きなところで二点ほど言わせていただきました。

鳥羽副部長

今につながるのかもしれないんですけど、当初の性能が確保されているか、その遺伝子の保存というのは、どれくらい何をもって確保されていると判断されるかっていうのがよくわからないと思って、何かこう、ここまでやっていればOKだっという目安的なものがあるのか。

目黒研究員

今LD 2号で実施している中身ですと、これまで積み重ねてきたものですか、当初の性能が記録として残っておりまして、この下の部分にも載せていますが、こういった何グラム取れたとか実際の数字が残っておりますので、同じように栽培してどのぐらい今の動いている菌株が取れたか、確認しながらということになっていくんですけども、やっぱりいくつか同時に栽培試験を行いますと、一つ二つはいいけど一つ収量が落ちるものですか、形質が悪いものが出てきたりとか、そういう場合はありますので、そういったものは過去の積み重ねてきたデータと比較して引いていくような形になっておりまして、LD 3号は今後データをとってカチッと決めていくことにはなるんですけども、今の段階で何グラム取れたらOKというのは難しいところではあります、積み重ねてきた2号と比較して収量が十分にとれているかと形質が著しく悪いものはもちろん除かなければならないし、そういったところで比較していきながら性能を確認していくような形になると思います。

大内委員

この試験については今後粛々と進めてほしいなという気持ちの中で、きのこの菌の事はわからないので、教えていただければと思います。LD 3号候補株及び予備株、必ず“予備株”と付くんですが、それはどういう意味ですか。LD 3号を最終決定するにあたって、今何10種類ぐらいをやって、それで最終的に令和10年までかかって最後に決定するのか、もしかしたら早く進んで市場に出せるような状況になるのか、この計画通りになるのか、教えていただければと思います。

目黒研究員

今動いています現行課題の方が令和5年度で終了ですけども、そちらの方で現在9菌株まで絞り込みを行っておりまして、こちらの現行課題の中でそのLD候補

1株と予備株も決定したいと考えておりました。ご指摘のあった候補株と予備株という表現については、今のところ、センターでは基本的に施設内での栽培試験をずっと繰り返しているような形になっておりまして、実際に生産者さんの方の栽培現場で栽培した時に、こっちで良いと決めていた1株だけで試験を行ってしまうと、外の栽培試験を行った時に、実は生産者的にはこっちの別の株の方が良かったとか、そういうこともあると情報として外部からいただきまして、まだある程度予備株も2つか3つかっていうところにはなるとは思うんですけども、一つに絞り込まないで、ある程度選択肢っていうか候補を残した上で、やっぱりこれが一番良いというのを生産者さんたちと一緒に決めていけたら、もっと現場でも使いやすいのが選べるかなというところで、今回は候補株・予備株ということで表現させていただいております。実際にこの株を最終決定するのはいつになるのかといったお話だったんですけども、こちらはまだこの計画の中でというところで考えておりまして、ある程度複数回試験は必要だと思っておりますので、2～3年はもちろん必須だと思うんですけども、この後半2年で、一つに絞り込むような状況であれば早く決めてしまった方がいいと思いますので、そういったところは状況を踏まえながら決めていけたらいいと考えております。

大内委員

今、もうLD2号の劣化が始まって、そろそろ17年経ってもうダメになるって言うので、このLD3号に変わるまではもつっていう可能性はあるんですか。

目黒研究員

もたせながらというところで、今いろいろご紹介した性能維持管理の技術も現段階でちょっとずつ使いながら、あとはその過去に保存していたものとか、うまく使いながら、一応今のところは問題なく品質の維持はできている状況なので、これは綱渡りになりつつはあるかもしれないんですけども、3号はカチッと決まるまではどうにか2号はもたせたいとは今の担当者としては考えております。

大内委員

野外とハウス栽培で、現状は何割がハウスで野外に何割ぐらい出るとかというのは。量的なものもあるんですか、分かれば。

目黒研究員

割とほとんど今のところ野外でやっていらっしゃる方のほうが多いのが現状で、ちょっとずつ簡易施設で時期をずらし、このくらいの時期から出てくるようなものややっていらっしゃる方が増えてきてはいるのかなというところで、まだ簡易施設が十分に普及しきれていないと言いつらい状況もありますので、3号の試験と普及と合わせながら、この簡易施設の方法も一緒に広げていけたらいいかなと

考えております。

大内委員

ありがとうございます。

陶山部会長

さっき、県独自のという言い方をしたんですが、ここのセンターでやる強みというか、大手企業さんが開発するのと違う強みというのは、やはり県の生産者と密着できるということです。特にこの野外栽培と簡易施設栽培、その野外と簡易施設栽培の場合は、宮城の気候、宮城の中でもいろいろありますが、ある程度環境が絞られる中で、生産者に密着して、生産者に一番合ったものを作っていくという強みがあるので、ぜひともそういうふうに進めていただきたいと思います。これ前回発表されたときも、言ったと思うんですが、菌糸細断による維持技術はすごく面白いと思うので、先ほど言った再現性が出るような、きちんとした技術として成り立つ可能性もあるし、微妙なノウハウが生まれるような気がするので、その辺を見落とさずに、ノウハウの蓄積あるいは論文文化できるような再現性のチェックとか、そういう所も含めて、広い目で力を入れていただければいいと思いました。もう一点、なるほどと思ったのが冷蔵や冷凍保存技術って、基本的には王道のものがあると思うんですが、確かにそのLD3号でどうだろうっていうところは、もしかしたら品種によって微妙な違いがあるのかもしれないという気がしたので、確かにそういう意味ではLD3号でも大丈夫か、LD3号でも他の機関でやられている方法で大丈夫なのかというのをチェックするというのは意義があるなと思いました。一般論としてそんなに差があるのかなという気はしたんですが、意外と強いとか、そういうこともあるかもしれないので。そういう意味でも、その品種特有の性質を見極めた上での冷蔵・冷凍保存技術という視点で考えれば、これを独自にやる意味もあるなというふうになんて思いました。説明の前までは、どういう意味があるかなと思っていたんですけども、説明聞いて納得しました。そのほか、よろしいでしょうか。皆さんのご意見通り、非常に推進すべき課題だと思っていますので、頑張って進めてください。ありがとうございました。

2) 報告事項

- ① 新規研究課題（経常的課題）の内部評価結果について
千葉企画管理部長が、資料4により説明した。
質疑・意見については次のとおりである。

陶山部会長

今の感触としてはうまくいっているという感じなんです。

玉田部長

実際に調査は先ほど説明がありましたけれども、調査は今年から3年間やっています、1番大きな成果としては、マツの生育状況が場所によってまちまちだということについて、土壌の断面を採って、その原因を統計的な解析を含めて実施しているということで、土壌の硬度、滞水等が複合的に大きく影響しているところでは分かってきていると思います。それを踏まえて、その辺の要因を突っ込んでいかなきゃいけないということで、今回の新しい課題でもその部分はいきたいということと、もう一つ大きな成果は本数調整伐です。これまでこういった森林の本数調整伐はどれくらいの割合で切ったらいいかというような事例がなかったということがございますけれども、今回面積は広いということで、できれば初回に多く切れば、今後の経済的な優位性ですかね、その後あまり切らなくても良いとか、そういうような優位性が出てくるんですけども、今まで以上に切った場合、例えば1伐2残とか、そういった強度の本数調整伐を行った場合に残った立木への影響はどうなるかというのは調査しておりまして、亘理・山元の調査地限定でしたが、そういったところの観察では特に影響はないということで、それについては海岸林の管理マニュアルの中に反映してもらっているという成果が出ています。

陶山部会長

ありがとうございます。植栽したクロマツはこのセンターから出した苗ですか。

千葉部長

種はここからです。ここから種を供給して、それをいろいろなボランティアさんや生産者さんに育苗してもらって出しています。

陶山部会長

種はバルクというか、全体でワンユニットというか、母樹識別はしないですね。要するに僕は遺伝のことを気にしているんですが、苗に遺伝的な違いはないですね、恐らく。全部同じ一つの、全体から採ったものを混ぜていろんなところに。

千葉部長

そうですね。ここにある今回植えたマツは抵抗性のクロマツの母樹なので、基本的には自然交配ではありますけれども、周りにマツが無いということを考えれば、ただ、種なのでクローンでは無いです。

陶山部会長

例えば成果に良い悪いが出た時に、それが苗の違いと遺伝的な違いというのがあったら、それはそれで重要なデータかなと思ったんですが。そこまでは差

がないって感じですよ。

千葉部長

そうです。

大内委員

松食いの防除を担当しているの、10月から名取、岩沼の方に県の整備課と一緒に、植栽後10年が経過するものもあって、その中で枯れてきているものもポツポツと見られる場所もあるということから、やはりこの研究の中で森林管理、適正な保育管理といいますか、植えたので今後は防除もしつつ、適正な管理っていう意味で、この調査を早くしてですね、今後の森林管理に役立てるようによろしくお願い致します。

千葉部長

ありがとうございます。先ほど説明した部分だと、1万本が5000本になって、その被害の拡大のメカニズムはこの調査でやっていくんですけども、これの他に後でご説明するんですけど、より強いザイセンチュウ、強力というのは樹幹の中で増殖が早いということなんですけれども、その強いものへの抵抗性があるマツの苗ですね、その種を供給できるような体制を準備してまいりますので、枯れた所にはより強力な抵抗性を有する苗を植えていくという計画で進めています。

大内委員

抵抗性マツという話は聞いていて、あくまで抵抗性は抵抗だということで、実際やってみるとやっぱり今後増える可能性もあるので、苗木も、より強いものを研究して出来るのであれば良いんですけど、その辺、継続して進めていただきたい、よろしくをお願いします。

星委員

今回この生育状況に関する調査は、県が植えたものだけに対して行うんですか。というのは、いろんな団体で植樹活動がされていて、例えばタブノキとか、聞いたら、クロマツがとにかく良いんだということで、多分県庁はクロマツ以外はやっていないと思うんですけども、ある団体では、タブノキが良いんじゃないかとか、いろんな樹種を植えるべきじゃないかとか、いろんな意見があったと思うんですけども、この際、折角ですから、タブノキやいろんな木々があるので、それがどうなっているかということと比較して、やっぱりクロマツだと、クロマツだとの結果を得られているか不安なところだと思うんですけども、それを出しておかないといけないんじゃないか、比較は必要じゃないかなと思うんです。クロマツだけ見て、多分枯れる状況っていうのは水分とか植えた年や風とかいろんな条件はあると思うんですけども、やはり比較は必要じゃないかなと思っていま

す。これは難しいでしょうか。例えば、原生林で言えばタブノキは結構海岸沿いに生えているんです、わざわざ植えなくても。だからタブノキでもいいのではと
思ったりすることがあるんですけども、それでも論文的にはマツしかないみたい
なことを聞いていて、タブノキは最初から却下されていた感じがあるんですけれ
ども、今回比較ができないのかなと思います。

玉田部長

今回の課題の中身、海岸防災林ということで対象にしているんですけども、お
っしゃる通りクロマツだけというような形になるかと思えます。ただ、現実的
には面積750ヘクタール以上の中でクロマツがほとんど占めているというような状
況もあるので、今回の試験は3年間という期間と担当一人というような現状も踏
まえて、今回については特定のクロマツで、とりあえずその成長状況を見させて
いただきたいというふうに思っています。そのクロマツの成長と併せて、その公
益的機能がどうなっていくかというようなところも今後検討はしていきたいとい
うふうに考えていまして、その公益的機能が高まっていくだろうというような中
で、今、防潮堤を作って、その背後にクロマツになるんですが、そういった環境
の中で例えばタブノキですとか桜とか植えられた場合に、そういう樹種が本当に
その後、健全に生育していく環境になるのかどうかというのは、この課題の環境
調査も含めて検討していきたいと考えております。

星委員

よろしくをお願いします。

陶山部会長

今のは気になっていたんですけども、この課題としては手に余るという感じが
あるので、その課題とは別にでもいいですし、この課題の中で気にしておくべき
事項として置いておいて、最終的な目標としてはやはり県としての幸せというか、
管理がうまくいくということなので、自分たちが植えたマツだけではなく他の人
が植えたかもしれないけど、タブノキはどうなっているかというのは、やはり気
にしておくことは正しいことだと思うので、別の課題でなくてもいいので、考え
てみていただければと思います。よろしくをお願いします。

- ② 令和6年度試験研究計画（案）について
千葉企画管理部長が、資料5により説明した。
質疑・意見については次のとおりである。

星委員

すでに決まっているものを動かすことはできないかもしれないんですが、最近テ
レビをつければクマの話題で、日本全国出没していると、それで林業関係の専門

の機関ですから、これに追加できるかどうか分からないんですけど、緊急の課題としてクマの対策、シカの対策はこれまでずっとやられてきていますけれども、クマは緊急課題じゃないかなと、本当に私たちの生活圏のすぐ側まで来ていると、これを、処分以外、処分しかないのかわからないですがその辺の結論も含めて、やはりクマ対策を緊急にとっていただけないかと、調査していただけないかと思うのですが、そういうことは無理でしょうか。

玉田部長

クマは今、自然保護課の方で重点的に対応しています。外部に委託してクマの調査の方はやっていると思います。クマの専門的な部会を作って、そこで検討もしております。私も部会のメンバーですけれども、森林総研の先生や専門的知識を持たれている方も参集した委員会を作って検討を進めているということです。クマは難しく、やはり専門的な方じゃないと出来ないというようなところもあるんです。参考にですけれども、ニホンジカの誘引餌の関係については、実は内陸の方にもシカが入ってきているというような状況の中で、例えば、シカは捕獲のために誘引餌というくくりわなとか、そういうものに餌を置いて仕掛けるやり方があるんですけども、それを内陸地に置いた場合にクマは大丈夫なのか、クマを錯誤捕獲しないのかというところを、今回のシカの誘引餌の調査では行うということで考えております。実際に捕獲するわけではないんですけども、餌を置いて、そこにクマ等が食べに来るかという調査を行おうと思っています。

星委員

せっかくシカが集まっているんだから、シカを餌にしてクマが食べてくれないのかな。

千葉部長

もう一つ、各事務所が自然保護課から依頼を受けてやっているので、各事務所と連携致しまして、堅果類、要するにどんぐりですね、どんぐりってのはいっぱいなったりならなかったりする年があるので、その調査をしております。それを私どものホームページで公表しておりますので、豊作の年はあまりクマは来ない、不作の年は出て来るという傾向があるということで、それを一つ目安にいただいております。

星委員

横のつながりで情報を共有し合うことで、すごく研究成果が上がると思います。

陶山部会長

その通りですね。その自然保護課の方で自然環境保全審議会からのデータを見ているんですけども、そういったデータをやはりこのセンターの職員がちゃんと

共有しているっていうのは結構大事だなと思って、県としてやっている事の中で森林に関する情報はセンターの職員の中で非常に話題になっている、重要性が増していることに関してはより共有に努めていただきたいということですかね。よろしくをお願いします。

(5) その他

宮城県林業試験研究・技術開発戦略について、見直しを令和6年度に行う旨を連絡。

(6) 閉会あいさつ（鳥羽副部長）

本日もありがとうございました。

先程クマの話題が出ておりましたが、情報の横のつながりという話も出てたんですが、どうしても県のホームページとかはその情報にたどり着きにくいといつも思っていて、豊凶の話もそうなんですけど、情報の公開の仕方をうまくやっていただけるともっと利用がしやすくなると思いますが、そういう部署間の話もそうだと思うんですけど、一般の我々がどうなんだろうとたどり着こうと思った時に、やはりたどり着きやすい方がより県がやっていることを我々がいろいろ知る術になりますので、ここで言ってもなかなか難しいと思うんですけど、工夫するようなどにたどり着けることがありましたらお願いしたいと思います。

今日もいろいろ意見が出てよかったと思います。ありがとうございました。

記入用の評価表は電子メールで送付する旨を連絡し、12月15日（金）までに記入の上提出を依頼し閉会した。